

舟山群島における漁村社会の変容から見る女性の役割

— 螞蟻島の“漁嫂”の暮らしをめぐって —

神奈川大学歴史民俗資料学研究科 于洋

要旨

本博士論文は、ジェンダーと漁村民俗誌に関する理論を基に、中国の舟山群島新区の螞蟻島という漁村社会の変容における女性の労働と自己認識、家族との生活、人生儀礼、廟の復興の分析視角をもって、実証的に考察したものである。本研究を舟山群島さらに全国に普遍化させることはできないが、ここで分析された実態は現実の中国における漁村像の一部になった。本研究では、伝統的な漁村社会と人民公社時代の漁村を経て、今日までも漁村で暮らしている女性に対し、聞き取りアンケート調査を実施した。

まず、序章において、舟山群島新区の設立などをはじめとした中国における近年の海洋経済発展の戦略を紹介し、本論の研究の背景、目的、先行研究を述べた。

第1章では、舟山群島における漁村社会の形成歴史の流れを考察した。また、漁村社会の形成と発展とともに、舟山の漁業発展過程にいくつかの段階があるのか検討した。そして舟山群島の螞蟻島を主たる研究対象とする文化的経済的状況を整理し、その中で、螞蟻島が舟山群島のなかでどのように代表的な地域であるかを明らかにした上で、螞蟻島の歴史と特色についても概観した。また、中国の解放後、浙江省の漁民政策を踏まえたうえで、それに基づいて行われた螞蟻島における「漁民」の生業集団化の過程を検証した。

第2章では、昔の伝統的な漁業中心に暮らした女性の姿を述べた。漁村女性の労働比重は重かったが、その労働に対する収入は少なかったため、長い間女性は家庭の中の地位が低く、彼女たちの労働も軽視され、まるで「牛馬」のようにこき使われる存在であった。人民公社時代、女性は「時間労働点数制」によって女性労働からも家庭収入を加わるようになり、家庭の中の決定権をも持つようになり、女性の家族内での地位が向上した。改革解放後、政策転換により漁村の産業も大きく変化し、女性は家事専業から、出稼ぎや自主創業の事例も増加してきた。

第3章では、漁村女性の視角から、「螞蟻島」における村落での家族と親族の構造変化を分析した。伝統的な漁村社会の家庭構造は、家族の構造形態が一般的に大家族の形態であり、家族成員は三世代、あるいは四世代が一緒に暮らすのが普通であった（秦兆雄 2005）。漁村男女の性的役割に応じた分業が普遍的にみられた。その時の漁村女性は嫁入り道具を分与されるだけで、均分相続には参与できなかった。後に人民公社が成立し、生活の集団化が実行され、家族内部の機能は集団へ委譲することになった。この生活の集団化も大家族を解体させ、半分以上の大家族は、親と子の世帯が分離することによって、小家族化した。改革開放以降、漁村社会における家族形態

もすこしずつ変わってきた。現在では息子が結婚すると独立するので大家族の形態は出現せず、夫婦と子供の小家族が圧倒的に多くなっている。特に、「一人っ子」政策の影響で、漁村の家族人口規模は著しく縮小している。

第4章では、漁民の産育・婚姻・墓葬という人生儀礼の伝統的な内容と現在の変化を表し、さらに人生儀礼から見る女性の家族帰属意識を明らかにした。今日の漁村では、例えば、調査地の螞蟻島のように、漁村といっても、ほとんど漁業ではなく出稼ぎをして生計をたてる人が一般的である。人生儀礼は海に関する内容が多少残り、まだ漁村の特徴が見られるが、おもに農村地域の漢民族を対象として行われてきた事例と今回の螞蟻島とは家族帰属意識のレベルにおいて大きな差異は見受けられなかった。

第5章では、「漁村」文化の代表として各種民間信仰に基づく祭祀活動を行う廟の復興過程を整理し、廟の再建と運営に注目し、再開後の廟で行われる儀礼を分析した。その中に廟で行う祭祀活動の主催はほとんどが女性中心となっており、拝みに来るのも女性が多い。この状況は、おそらく漁村における男女がそれぞれの「責任」を分掌していると言えよう。一方、螞蟻島における現在の毎年祖先祭祀から見ると、女性は祖先祭祀活動において、重要な役割を果たすようになった。改革開放後、男性が出稼ぎで村を離れるようになり、清明節や位牌祭祀の時に、村に帰れないことが多くなった。そのため、男性に代わって女性が墓参りや位牌祭祀を行うように変化してきた。この時点で、女性が墓参りに参加できないという認識が薄れ、家に残された女性が家庭の仕事の1つとして祖先祭祀にもせざるを得なくなった。

結論として、本論は舟山群島における漁村社会像と「漁嫂像」は、中国人の生活世界の1つの側面を現してきたと考えられる。以上の漁村のさまざまな民俗変容によって、現在螞蟻島の漁村は、伝統的な漁村と比べて大きく変質・変容したといえる。なぜかという、「漁村」と言っても、全然漁業に従事しない人が半分以上を占めているのである。特に、漁村工業化による大勢の外来人口流入と新しい文化要素の流入は、螞蟻島の地元の人々の生活観や世間観、価値観にも少なからざる変化をもたらしたと考えられる。漁村社会を変質するとともに、漁村の伝統的な民俗も変容し、特に、漁村で特有の民俗事象が消滅しつつある。この漁村の無形民俗文化財の保護においては、早くこうした文化財保存の動きをしたほうが良いと考える。一方、漁村社会の変質過程においては、漁村女性の地位と役割も変わってきた。まず、女性自身は、労働の参加によって、女性自身が労働主体としての自己認識の自覚化を実現した。そして、女性は自己価値の実現とともに、彼女らの家庭での役割も、従属的な地位から現在の家庭を半分支える地位（半边天）になった。彼女らは、無意識的ではあるが、結果的には漁村における重要な民俗文化財を保護する存在であったことがわかった。

最後に、今後舟山群島における漁村社会の研究課題、あるいは、本論でまださらに研究する必要がある課題は、やはり、中国における他の地域の漁村社会と比較研究することが必要と考える。さらに、中国と他の国の漁村との比較研究もこれからの課題としたい。